

# 共同研究の概要

小島道裕

## 一、研究の目的

本巻は、国立歴史民俗博物館共同研究（基幹研究）「歴史文化史料に基づく日本中世社会像の再構築」C班「中世文書の様式と機能および国際比較と活用に関する研究」（二〇一六―二〇一八年度）の成果報告書である。

まず、本研究の目的について述べておきたい。

古文書は、そこに書かれた内容が歴史学に有用なだけでなく、それ自体が重要な歴史資料である。本館は、既に数千点の中世文書を収蔵し、多様さにおいては全国有数のコレクションを形成している。二〇一三年には企画展示「中世の古文書―機能と形―」を開催し、各ジャンルの文書二〇〇点以上をまとめて展示したが、多様な収集文書による総合的な展示では、家わけ文書の内在的な論理を超えた、客観的な外在的論理によって内容を組み立てる必要があった。しかし、このような総合的中世文書展は、実はこれまで一度も行われたことがなく、そのバックボーンとなりうるような、各ジャンルにまたがる多様な様式と機能を歴史的に扱うことのできる総合的な古文書学も十分発達していないことが痛感された。

学界的に見ても、日本における古文書学は、近年全体的な体系の再構築が求められており、特に古代文書と中世文書の連続性と変化をどのように理解するかがひとつの課題となっている。そこで、前後の時代や関連分野も含む研究会を組織して、多様な古文書を所蔵し、それをを用いて歴史資料として歴史叙述を行なう博物館の立場から、中世文書についての新たな体系の構築をめざす。また、文書という存在の持つ社会的な意義についても検討を行い、それがモノとしてどのように機能したかを、歴史学以外の研究者も交えて考察することで、社会史の中に位置づける。日本の文書の特質を明らかにするためには、国際的な比較、特に日本と同様に、中国の文書様式を元に独自の文書体系を築いた韓国（高麗・朝鮮）の文書との比較が有効であり、社会的背景と文書の関係、すなわちそのような文書と文書体系を生み出したそれぞれの社会自体の特質についても、これまでにない考察が可能になる。これらの点について、韓国の研究者の協力を得て、実物の比較による研究を行なう。また中国などとの比較にも道を開く。

以上の研究に基づいて、企画展示等において広く成果の普及を図り、また博物館資料と連動して、大学等における古文書の基礎教育にも用いることができるようなコンテンツの開発を行う。

## 二、研究会の記録

(発表者の所属(発表当時)は、ゲストスピーカーのみ記した。共同  
研究員については、三、研究組織を参照。)

### 二〇一六年度

・四回の研究会を国立歴史民俗博物館において開催し、毎回、研究発表の他、館蔵古文書を実際に見ながらの討議を行った。  
・古文書複製(琉球王国文書)に関する調査と作業、および、韓国の古文書所蔵機関の予備調査を行った。

### 第一回研究会 二〇一六年五月二七日(金)・二八日(土)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第二修復室  
小島道裕 「企画展示『中世の古文書』(二〇三年)の総括と課題確認」  
全 員 「日本古代中世古文書学の課題」各自の研究予定テーマを説明

### 第二回研究会 二〇一六年九月九日(金)・一〇日(土)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第二修復室  
仁藤敦史 「近年における古代古文書学の展開」  
小倉慈司 「奈良朝写経と正倉院文書」  
丸山裕美子 「唐代の書儀と文書」  
三上喜孝 「東アジア古文書の中の画指」

### 第三回研究会 二〇一六年十二月一日(木)・二日(金)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第二修復室  
朴 竣 鎬 「署名と花押について」

文 叔 子 「中世から近世へ―財産権認証の簡潔化を表す官文書―」  
川 西 裕 也 「朝鮮時代の国王関連文書の廃棄方式」

### 第四回研究会 二〇一七年三月二日(木)・三日(金)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第二修復室  
佐藤雄基 「日本中世における院宣・御教書・直状の展開―所謂「公文書化」をめぐる―」  
長村祥知 「位記と符案にみる中世公家文書の一側面」  
田中大喜 「鎌倉期武家の置文と讓状」

### 二〇一七年度

・三回の研究会を国立歴史民俗博物館において開催した他、韓国の古文書所蔵機関三箇所を訪問し、実物資料を実見しながら、現地の研究者との交流を行なった。国立歴史民俗博物館での研究会においても、研究発表の他、館蔵古文書を実見しつつ討議を行った。  
・韓国の古文書などについて、研究と展示に用いるための複製の制作を行なった。  
・企画展示および「歴博フォーラム」「国際シンポジウム」の計画を進めた。

### 第五回研究会 二〇一七年六月九日(金)・一〇日(土)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第二修復室  
古川元也 「モノとしての古文書―鎌倉寺社文書を中心に―」  
横内裕人 「平安時代における東大寺大衆の発給文書―その変遷と背景―」  
高橋一樹 「日本中世地域社会の文書リテラシーをめぐる諸問題」  
丸山裕美子 「唐の告身と日本の位記―古文書学的比較研究―」

〔協議〕

- ・企画展示について
- ・韓国における研究会の計画について

第六回研究会Ⅱ韓国古文書調査 参加人数…一三名

二〇一七年八月二十九日(火)

国立ハンゲル博物館展示見学・国立中央博物館所蔵文書閲覧・展示見学

八月三〇日(水)

韓国学中央研究院蔵書閣所蔵文書閲覧、展示見学、施設見学

八月三十一日(木)

ソウル歴史博物館所蔵文書閲覧・展示見学

第七回研究会 二〇一七年二月一七日(日)・一八日(月)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第一調査室

金子 拓 「中世の古文書体系における信長・秀吉文書の特徴」

松尾恒一 「興福寺維摩会と文書の授受―古代・中世、顕教僧の昇進と仏教儀礼―」

〔協議〕

- ・企画展示について(出品資料案の検討など)
- ・「歴博フォーラム」「国際シンポジウム」の開催について

第八回研究会 二〇一八年三月二日(金)・三日(土)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第二修復室

四日市康博 (沖縄県立芸術大学付置研究所) 「イルハン朝官文書の印章と文書様式」

荒木和憲 「中世日本の外交文書」

藤田励夫 (文化庁) 「安南外交文書について」

〔協議〕

- ・企画展示について(出品資料および図録の構成について)
- ・「歴博フォーラム」「国際シンポジウム」の開催について

二〇一八年度

・二回の研究会を国立歴史民俗博物館において開催し、企画展示の準備と総括、および図書刊行についての準備も行った。

・企画展示「日本の中世文書」を開催し、図録の刊行、電子コンテンツの開発を行った。

・歴博フォーラム・国際シンポジウムを開催した。

・図書刊行について計画を進めた。

第九回研究会 二〇一八年六月一〇日(日)・一一日(月)

国立歴史民俗博物館第一会議室・第二修復室

鈴木卓治 「博物館展示・資料画像・デジタルコンテンツ」

橋本雄太 「中世文書のオンラインコンテンツ化に向けて」

〔協議〕

- ・企画展示の構成と準備状況について
- ・歴博フォーラム・国際シンポと出版について
- ・企画展示「日本の中世文書」の解説原稿について(読み合わせ)

〔閲覧〕

企画展示の「Ⅱ中世の文書へ」関係、および「エピソード…近現代に受け継がれた文書の形」関係

第一〇八回歴博フォーラム 「日本の中世文書」二〇一八年一〇月二七日(土)

国立歴史民俗博物館講堂

小島道裕 「趣旨説明」

小倉慈司 「古代日本における『文書』の誕生」

佐藤雄基 「中世日本における書札様文書の広がり―古代から中世へ―」

田中大喜 「將軍の文書と武士団の文書」

横内裕人 「寺院文書の特徴―集團意思決定の方法と様式―」

金子 拓 「戦国大名の文書と天下人の文書」

(総合同会 荒木 和憲)

国際シンポジウム「東アジアの古文書と日本の古文書―形と機能の比較―」

二〇一八年二月十七日(土)

国立歴史民俗博物館講堂

小島道裕 「趣旨説明」

〈セッショョン1 韓国の古文書をめぐって〉

川西裕也 「朝鮮王朝の国王文書」

朴 竣 鎬 「韓国古文書の花押」〈韓国語逐次通訳〉

文 叔 子 「朝鮮における私人間の契約文書について」

三上喜孝 「日韓古文書比較研究のための二つの視点―『前白』木簡と画指―」

〈セッショョン2 中国の古文書をめぐって〉

黄 正 建 (社会科学院) 「中国古文書学概論―公文書の様式研究を

例に―」〈中国語逐次通訳〉

阿 風 (社会科学院) 「明清時代の『信牌』」〈中国語逐次通訳〉

丸山裕美子 「中国文書様式の変容と変容」

〈セッショョン3 アジアの文書と外交〉

荒木和憲 「外交関係の文書―一五〜一六世紀の現存文書を中心として―」

て―」

藤田励夫 (文化庁) 「安南日越外交文書にみる花押についての試論」

四日市康博 (立教大学) 「イルハン朝(イラン)の文書」

〈討論〉

総括コメントと司会・高橋一樹・小島道裕

第一〇回研究会 二〇一九年三月八日(金)・九日(土)

国立歴史民俗博物館 第一会議室

〔研究発表 研究報告の執筆に向けて〕

三上喜孝 「韓国出土の文書木簡(仮)」

小倉慈司 「写経所における文字伝達(仮)」

仁藤敦史 「古代公文書の成立条件(仮)」

丸山裕美子 「告身と位記」

佐藤雄基 「日本文書史における書状の成立と展開―鎌倉期武家の書

状まで

田中大喜 「中世武家の讓状と置文」

松尾恒一 「三つの牛玉宝印―牛玉宝印・牛玉宝印札・牛玉杖―」

古川元也 「モノとして残る文書(仮)」

川西裕也 「朝鮮王朝の古文書における捺印の位置について」

荒木和憲 「中世日本の往復外交文書」

金子 拓 「織田信長馬廻の発給文書について」

小島道裕 「戦国大名の印判状について 付、中世文書におけるジェ

ンダーの問題」

橋本雄太 「中世文書の展示コンテンツ開発とそのWebシステム化」

鈴木卓治 「企画展示におけるスマートフォンむけ音声ガイドの試行

と考察」

〔協議〕

・企画展示および関連事業の総括

・今後の活動について(刊行物の計画)

### 三、研究組織

(◎は研究代表者、○は研究副代表者。肩書は最終年度当時)

- 丸山裕美子 愛知県立大学 日本文化学部・教授
- 川西裕也 新潟大学大学院 現代社会文化研究科・助教
- 佐藤雄基 立教大学 文学部・准教授
- 高橋一樹 武蔵大学 人文学部・教授
- 桃崎有一郎 高千穂大学 商学部・教授
- 横内裕人 京都府立大学 文学部・教授
- 金子 拓 東京大学史料編纂所・准教授
- 朴竣鎬 国立ハングル博物館・学芸研究士
- 文叔子 ソウル大学法学研究所・研究員
- 古川元也 日本女子大学 文学部・教授
- 長村祥知 京都府京都文化博物館・学芸員
- 松尾恒一 本館研究部・教授
- 仁藤敦史 本館研究部・教授
- 小倉慈司 本館研究部・准教授
- 荒木和憲 本館研究部・准教授
- 三上喜孝 本館研究部・教授(※総括班所属)
- 鈴木卓治 本館研究部・准教授
- 橋本雄太 本館研究部・助教
- 田中大喜 本館研究部・准教授
- ◎小島道裕 本館研究部・教授

### 四、研究の成果と課題

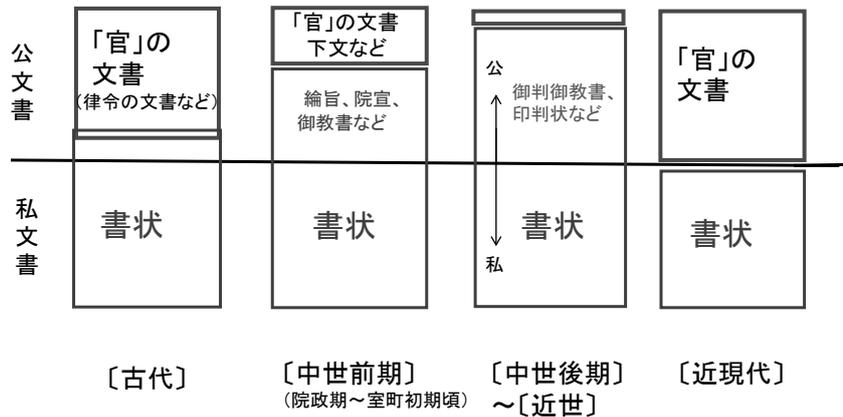
本研究は当初から日本の文書史についての企画展示と一体的なものとして計画しており、その課題として掲げたのは、総合的な中世文書展を

実施する背景となるような、日本における古文書学の体系的な再構築であり、特に、古代文書と中世文書の連続性と変化、および韓国・中国など関連性の強いアジア諸国の文書との比較であった。企画展示「日本の中世文書―機能と形と国際比較―」(二〇一八年一〇〜十二月)を目標としながら、研究会における各時代・分野からの報告や、国立歴史民俗博物館および海外(韓国)の所蔵機関における実物資料の調査を通じて議論を重ね、比較研究と古代から中世への展開を一体的に捉えることで、新たな体系としての展示を実施することができた。

すなわち、古文書を、官僚機構が発給する「『官』の文書」と、個人が発給する「書状」の二系統に分け、それぞれがどのように機能するか、という視点で整理を行った。日本においては、古代から存在した書状様式の文書が次第に機能を拡大して公文書としても広く用いられるようになり、一方、律令に由来する「『官』の文書」は形骸化していく。このような現象は東アジアでも特異なものであり、王命系の文書では、日付上に漢字朱方印を一つ押印する様式が広く東アジアで用いられ、ペルシャのイル・ハン朝にまで及ぶのに対し、日本では繪旨や御判御書などの、公印を押さない書状様式の文書が卓越する。戦国時代に行われた印判状も基本的には花押の代替として印を用いているが、北条氏の「虎の印判」などは、日付上に押印しており、東アジアの中で見ると、「国際標準」に準拠したものと見なすことができる。しかし、江戸幕府においては、その様式は受け継がれず、老中奉書など書状様式の文書が公文書として用いられたまま近代に至る。(以上の見通しを展示では図1として示した。)

このような整理は、国際的に通用しうる概念を用いて、東アジアの中での日本の文書の特質を明らかにするものであり、従来通説的であった「公式様文書↓公家様文書↓武家様文書」という、日本における現象を追った整理とは異なる、本質的で、従って国際的たりうるものとなった

## 日本の文書様式の時代による特徴



本展の流れを簡単に図示した。日本の前近代の文書は、個人が出す書状形式の文書が公文書として通用し、大部分を占めるに至った点に特徴がある。しかしそれは中世に始まるのではなく、古代から存在した書状様式の文書が次第に卓越したと見なすべきであろう。

図1 日本の文書様式の時代による特徴

日本における文書史の流れをイメージするために企画展示の冒頭に掲げた図。ごく粗いものだが、本研究の趣旨を反映しており、様々にアレンジすることで今後の研究に役立つ可能性もあるため、敢えて掲げておきたい。(原図では、「官」の文書を青、「書状」を赤で色分けしている。)

と考える。

また、研究テーマの一つに掲げた「活用」の面においても、展示とそれに伴うコンテンツの開発によって、前進させることができた。一見しただけではあまり面白くなく、とかく難解とされる古文書の展示方法については議論のある所だが、見た目の様式を中心としつつ、機能の問題として着目すべき点や全体のストーリーを明示したこと、観客の必要に応じて、図録、キャプション、音声ガイド、キャラクターによる説明、と四層に構成した解説体系を設けたことなど、一つの在り方を提示した。デジタルコンテンツについては、古文書の超拡大(二千倍まで)と、画面と音声による解説の二つのタッチパネルを開発し、さらに「日本の中世文書WEB」としてホームページでの展開も実施している(本書橋本論文参照)。展示を中心に、図録・書籍の刊行、デジタル素材の提供、といった、一種のメディアミックスとして成果の発信と展開を図っている。

企画展示図録においては、研究的な内容を重視して、各章および個別資料の解説を掲げた他、展示プロジェクト委員(共同研究員が兼任)による個別テーマの「コラム解説」も収録し、研究成果の内容を盛り込んだ。

歴博フォーラム・国際シンポの内容については、別途下記の図書として刊行した\*。総合的な構成となることを意識し、各分野についての概括的な内容を含んだ内容であり、先端研究としての内容をより優先した本研究報告との棲み分けを行なっているため、合わせてご参照いただければ幸いである。

※国立歴史民俗博物館監修、小島道裕・田中大喜・荒木和憲編『古文書の様式と国際比較』(勉誠出版、二〇二〇年二月)

(国立歴史民俗博物館研究部)